

リ・モンスター
Re:Monster
金斬兇狐 Kanekiru Kōketsuno
4

目次

本編
7

アポ朗所持アビリティ目録
263

モンスター大図録
Vol.3
(ゴブ爺&赤髪ショート監修)
285

オガ吉 改め ミノ吉

ミノタウロス ランクアップ
牛頭鬼・新種に【存在進化】したアポ朗の親友。
棍棒や斧など、重量級の武器を得意とする。

岩勇

フォクス・ガルド
【四象勇者】の一人である
【岩鉄の勇者】。
物理攻撃は四人の勇者の
中で最強。

第一王妃

始祖王ロルギスの
血を引く、お転婆姫の
実母。

闇勇

フォクス・ガルド
王国が誇る【四象勇者】の
一人である【闇守の勇者】。
どこか得体の知れない、
怪しい女性。

ダム美 改め カナ美

アポ朗と共に生まれ育った
仲間にして妻。
現在の種族は吸血貴族・
亜種。

オガ朗 改め アポ朗

ゴブリンに転生した主人公。
アブノーション
【吸喰能力】によって、
喰えば喰うほど強くなる。
現在は使徒鬼・絶滅種に
ランクアップ
【存在進化】している。

女武者

アポ朗同様、別世界からの
来訪者である【異邦人】。

水勇

フォクス・ガルド
【四象勇者】の一人である
【水震の勇者】。
仕事ならなんでもこなす
危険な男。

お転婆姫

シュテルンベルト王国の王女。
線の細い見た目に反して、
性格は相当わがまま。

Main Characters
主な登場人物

《百三十六日目》

早朝、骸骨百足達に乗った遠征組一行が《クーデルン大森林》の拠点から出発した。

今回外に出る総数六十六名には昨夜、以前からレプラコーン達に作らせていた外套——個人の好みに合わせてタイプは様々。ちなみに俺とカナ美ちゃんはポンチョ型を愛用——を配給している。

そんな訳で、皆真新しいそれを装備した凛々しい姿で居残り組のメンバーに見送られる事となった。外套の背面には傭兵団《戦に備えよ》の紋章、右肩には所属部隊の特徴を示した部隊章、そして左胸には個々の階級章が、金糸によって刺繍されている。

外套の生地は、高い耐久力を誇るミノタウロスなどのモンスターが落とすアイテムの一種で、防刃・防魔・防寒・防熱効果、更に防水性にも優れている。ドロップ率が低く、レア素材として有名だが、ミノ吉くん達が大量にボスミノタウロス狩りをしてくれたので十分確保できていた。これをメインに、タートルスネークの甲羅の粉末やクリスタルクロコダイルの鱗皮など、様々なモンスター

素材を特殊な技法で一つにした逸品だ。

素の状態でもそこら辺の防具より優れているのだが、追加で俺が二つほど能力をエンチャントしている。

今後はコレを量産して、傭兵団の正式装備とする予定である。

さて、話を遠征に戻す。

今回で骸骨百足による森外遠征は二回目となるのだが、拠点から森の外に最短距離で出られる獣道のようなルートが、既に幾つかできていたりする。

これは前回の道中で、スライム状になって骸骨百足をコーティングしていた俺の分体が、アビリティを使って地形を変化させた為だ。

つまり一回目の時ほどは時間を浪費せずに進める訳だ。当然、拠点の場所を割り出されないようにカムフラージュも施している。

道幅が骸骨百足一体分しかないので、遠征組は森を出るまではぞろぞろと列を成し、無事森の外に出た後、それぞれの目的地へと向かって行った。

今回のグループは以下の通り。

一つ目は俺、アポ朗^{ろう}率いるシュテルンベルト王国の王都《オウスヴェル》に向かうグループ。

メンバーはカナ美ちゃんや赤髪^{あかがみ}シヨート、風鬼^{ふうき}さん達やセイ治^じくんなどの総数二十四名。使用している骸骨百足は四台。

二つ目はミノ吉くん率いる、迷宮都市にて修業と物資調達などを行うグループ。

メンバーはアス江^えちゃん、それに鬼若^{おにわか}やボス猿などの総数二十名。骸骨百足は三台。

最後は傭兵団内でよく働いた報酬として、王国や帝国領内に残してきた家族を迎えに行くグループ。

前回はミノ吉くんのグループに配属していた人間のマグルなど、報酬を受け取る者とその護衛役を含め総数二十二名。骸骨百足は三台。

それぞれにそれぞれの問題があるが、まあ、許容できないような失態はおかさないだろう。と、思いたい。いや、思う事にしよう。

うだうだと悩んでも意味が無いので、気持ちを切り替えよう。

さて、王都に向かう俺達は、今日一日は出来る限り走り続けて、行ける所まで行く事にした。
骸骨百足は搭乗者に殆ど揺れを感じさせないので、道中は武器の整備や簡単な勉強会などを行い、移動時間も有効に活用。

そして夕暮れ前には森を抜けた先にある広大な草原と丘陵地帯を踏破し、大鷲型モンスターのファレーズエーグルが生息している山道さえも越えて、街道に至った。

前回は初めて遭遇するモンスターを見つけては狩りをしていたので、かなりの時間を要したが、それ等を見れば一日でこれだけ進める、とわかった。

疲労する事がなく、普通の馬車よりも速度を出せる骸骨百足は、やはり移動手段として優秀だ。それに形を弄れば原始的ながら戦車にも成るし、色々使い道は多い。多大な可能性を秘めた骸骨百足の今後の運用について思考を巡らせつつ、街道近くの平野にて野営する事になった。

組み替えればテント代わりにもなる骸骨百足。やはり便利である。

その夜。昼間あまり訓練できなかった分、夜の訓練は二時間かけてかなりハードにしてみた。

今回は雷竜人のラムラさん達を中心に鍛えていこうと思っているので、彼女達の負傷が特に激しい。

幸い治療能力に特化したセイ治くんが、大怪我をしても即座に治してくれるので安心だ。

それから、やや手加減するカナ美ちゃんと本気で挑む赤髪シヨートが剣戟を交える姿は、月光に照らされてそれはもう綺麗だった。

いやはや、カナ美ちゃんも赤髪シヨートも良い動きをするようになったもんだ。

本日の能力合成結果。

【弧月閃】＋【飛翔斬】＝【弧月飛翔閃】

《百三十七日目》

今日も骸骨百足に乗って街道を進み、朝の十時頃には防衛都市《トリエント》に到着した。

そのまま通り過ぎててもよかったが、ついなのでファルメール商会《トリエント》支部に顔を出してギャンブル大好き副店長と会談。更にそのついでにモンスター素材の売買や相場の調査を行い、一時間足らずで都市を出立。

その後はしばらく街道をゆるると進みながら、近くにいたビッグコッコなどの雑魚モンスターを狩って昼食にした。

巨大な鶏と言うべきビッグコッコの肉は生でもさっぱりとして美味いが、焼くとさっぱり感を残しつつ肉汁が溢れ出て、噛めば噛むほど白米が欲しくなる食材になる。

焼き鳥が絶品です。今回はタレが無いので、塩のみなのがちょっと残念ではあったが。

それから赤髪ショートによれば、ビッグコッコは毎朝早くに二、三個大きな卵を産むらしく、ビッグコッコを支配するだけの能力がある者にとっては良い家畜になるのだとか。今回は荷台にも余裕があるので、四羽ほど《使い魔》^{ファミリア}にして連れていく事にした。

明日の朝が楽しみである。

玉子焼きにして食べようか、それとも目玉焼きにしてやろうか、それともそれとも……と明日が待ち遠しい。

そうして和氣^{わき}藹々^{あいあい}と昼食を喰っていたら、俺達は武装した男達に絡まれた。

絡んできたのは、まず傷が一切ない無駄にキラキラでテカテカに装飾された、観賞用だろう武具を装備した肥満体型の青年が二人。それに聖布と銀糸で編まれたローブと宝石魔杖装備の病的にやせ細った少年。そしてガッチリとした体格で、多少は実戦向きではあるがやはり無駄な装飾のある騎士風装備の青年、という四人を筆頭とした総数三十四の集団だ。

明らかに貴族らしきこの四人以外の装備はどれも実戦用であり、長年使い込まれているのがよく分かる品もあれば、新品同然な品もある。

チンピラも交じっているようだが、魔槍を手にする長い髭を蓄えた老人や、ぶ厚い筋肉の鎧と大

剣型マジックアイテムを装備した中年男性など数名はそれなりの使い手なようで、身体からは大量の血の臭いが嗅ぎとれた。

少なくとも数十人は殺しているに違いない。

多少は喰いがいのありそうな者達を見つけて食欲が刺激されたが、分体を寄生させればいい手駒になりそうだ。それに値する輩を静かに分類。また情報が欲しかったので、しばらく様子を見る事にした。

さて絡まれた理由だが、どうやらカナ美ちゃんとラムラさんという、傭兵団《戦に備えよ》^{バトル・ラム}が誇る美人六傑の内の二人が、貴族四人の感性を刺激してしまったらしい。

貴族四人は、貴族の子息がコネ造りの場として活用している《貴剣の鍛錬場》^{アンテゴラ・ランツ}と呼ばれる組織の会員だそうだ。モンスターハンティングに出掛ける為、それぞれお抱えの私兵を引き連れて行動する事が多いのだとか。

彼等は色々と言っていたが、要約すると『女どもをコチラに寄せ』となる。

その『女ども』には、赤髪ショートや風鬼さんなども含まれていた。

貴族四人の目的はカナ美ちゃんとラムラさんの二名ではあるが、他は配下にでも宛^{あそ}がうつもりのだろうか。

凄く典型的なダメ貴族です、本当に鬱陶しい。

貴族ならこの世界なりに高水準の教育を受けているはずだろうに、何故こうなってしまうのか。

……などため息まじりで呆れている間に、男達はコチラを包囲して逃がさないようにしていた。動きに淀みが無いし、なんら気負いもない。明らかに手慣れていて、どうやら今までも色々やってきたらしい。

包囲を終えた後はそれぞれの武器に手を添えながら、嗜虐心に染まった下卑た笑みを浮かべている。

アチラさんの装備は一応末端員まで、金を注ぎ込んで揃えたのだろうマジックアイテムで構成されていた。普通の亜人種や人間の集団だったら、確かにとり囲まれてしまえば抗い難いに違いない。そんな数の利と地の利に加え、そもそもこの世界の貴族は一般人よりも強くなりやすいらしく、同じ【職業】持ちで同じレベルだろうとも、基本的に農民と貴族が競えば貴族が勝る。

これが、脈々と受け継がれた【血統】の力である。

貴族四人を観察したところ、痩せた少年はまず間違いない【魔法使い】系の【職業】を持っているみたいだ。四人の中でもリダー格な騎士風装備の青年は、見た目通りに【騎士】系の職業持ちに違いない。装備は無駄に派手だが、そこそこ戦えるだけの実力はあるようだった。

残る肥満体型の二人は、まあ、雑兵とかが似合いそうだが、装備品はそれなりに高価なマジックアイテムなので、部隊長とかくらいが適当か。

……さて、どうするか。撃退するという選択肢は絶対として、他の団員に殺らせるか、俺が単独で殺るか。

と黙っている、痺れを切らしたアチラさんが先に手を出してきた。肥満体型の片割れが手下に顎で指示し、それに従った下っ端が俺の隣に居たカナ美ちゃんに手を伸ばし、その肩に指先が触れて――

次の瞬間には、肩に触れた下っ端の頭部が天高く舞い上がっていた。

一瞬で切り裂かれた顎の断面から勢いよく鮮血が噴き出し、やがて重力に引かれて落下。赤い雨となつて俺とカナ美ちゃんの全身を濡らした。

……血でトッピングされたビッグコッコの焼き鳥は、ちよつと微妙な味だった。

いや、美味しいのは美味しいのだが、下っ端の血が不味いので大きな減点対象となっている。その血はドロドロとしており、色々と不健康な生活をしていないと連想させる。

死んだ後も他人を不快にさせるとは、なんて奴だ。

さて、最初の犠牲者が出た後は、もうカナ美ちゃんが暴れに暴れてくれた。もう止めたげて、と思っくらいに酷い有り様である。

憤怒を通り越した感情、とても言うのだろうか。カナ美ちゃんが高速で移動しながら振るうクレイモアは人体を紙のように切り裂き、殴打で人肉を爆散させ、虚空から発生した氷の茨が骨肉を凍らせる——量産されていく肉片と血の海と、屍の山。

そして反撃に転じた僅かな古強者は、しかし「魔眼封じの眼鏡」を外した【吸血貴族・亜種】であるカナ美ちゃんの【魅了の魔眼】の前に屈していく。

怒り状態の魔眼は強力すぎて、抵抗できた者は殆どいない。一応抵抗できた二名も、カナ美ちゃんと魔眼の虜達による圧倒的な物量攻勢で押し潰されました。

ほとんどイジメだった。戦いなどではなく、虐殺レベルだった。

一応惜しい人材も居たので、最後はカナ美ちゃんを背後から抱き締めて強制的に止めた。こうでしないと止まってくれないカナ美ちゃんには困ったものだが、まあコレも個性なのだから仕方ない。

それで、四肢の一部を引き千切られて悶絶している四人に加え、俺が分類していた生存者達を一ヶ所に集めて治療を施すと同時に、分体を寄生させる。

経験則から言って、貴族は総じて一般人よりも美味い。そして目の前には四人の貴族。まだまだ年若い、何か得られるモノがあるかもしれない。

だが、俺は今ここで四人を喰う事は止めた。

喰わずに帰還させた方が、色々と利益が出ると判断したからだ。

既に「草」^{クサ}として帰還させた貴族の奴隷達が情報を集めているが、情報源は多い方が何かと便利だし、《貴剣の鍛錬場》^{アノデゴフツラツ}についての情報——たとえば、殺してもいいような悪徳貴族の外出予定など——も手に入るかもしれない。それに四人の家の財産などを考えると、今喰うのは勿体ない。

という事で、分体を寄生させて俺の奴隷となった四人に笑いかけると、彼等の顔色は真っ青を通り越して白くなり、気絶してしまった。

何故だ。……もしかしたら死体を目の前で喰ったのが悪かったのだろうか。

とりあえず生存者全員に分体を寄生させた後、その辺に放置して、俺達は旅路を進んで行く。今連れていくのは、面倒である。

いつか手駒か、あるいは食料とするその時まで——いや、もう出会わないかもしれないな。

《百三十八日目》

貴族とのイザコザの後には特に何も無く、俺達はサクサクと進んで昨日の夕方には《シーリスカ森林》を抜けた先にある《メイスン村》にまで辿り着いた。

そのまま止まらずに進んでも良かったが、カナ美ちゃんや赤髪ショートを筆頭とした女性陣の強い要望によって一泊する事となった。

ここの温泉の効能には美肌や若返りなど女性にとって嬉しいものが多い。この寄り道は予想通りではあったし、時間もあるので何ら問題はない。

ただ、泊まるのを支持した男性陣全員が今朝、木に縄で吊るされた状態で発見されたのだが、その理由はあえて追及しない。

個人的にも、拠点とはまた違った効能の温泉が湧くメイスン村で過ごすのは、リフレッシュできて気持ちが良いモンだった。それに、温泉を目当てにしてやってくる客に対する姿勢など、色々と参考になる。

半分趣味で始めた拠点の《温泉施設》でも取り入れたいモノがあったり、こんなモノがあればいいのではないかと考えついたりする事もチラホラとあった。

そうだな、まずは和風の作業服をレプラコーン達に作ってもらう事にしようか。

普段通り朝早くに目覚め、大きな温泉玉子——ビックコツコの卵を使用——を皆で食べた後に軽い訓練をし、疲れて汗ばんだ身体を清める為に温泉に入った。

幾つかある温泉を楽しむながら巡った後、湯冷ましにと、単身でフラリとメイスン村のもう一つの観光名物である大きな滝に赴いた。

村からしばらく歩いた先にあるこの滝では、以前と変わらず大量の水飛沫が上がっている。そのおかげで周囲の温度はかなり低く、火照った体を冷ますのには丁度いい。

そして深く清涼な水で満たされた滝壺からは、やはり相変わらず巨大で強力な生物——ここ等一帯の守り神とされている竜種——の気配が感知できた。

前回来た時の大鬼の状態では勝てなかったかもしれないが、使徒鬼となった現在の俺なら十分可能性はありそうだ。

が、俺はメイスン村が気に入っている。

温泉は気持ちいいし、住民の気質や接待にも満足できる。

しかしもしこの竜種と戦う事にでもなれば、余波だけで間違いないメイスン村は滅んでしまうだろう。手加減して勝てるような相手ではなさそうなので、どちらが勝つにしろ、この辺りの地形は

大きく変われると思われる。

もちろん生きた竜種を喰ってみたいは、ある。

しかしココはグツと我慢して、喰っても問題ない竜種と出会える機会を待つ事にした。迷宮に潜るのが手っ取り早いに違いないので、やはり迷宮には一度挑戦する必要性がありそうだ。

そう考え、滝に背を向けてメイスン村に戻っている最中、滝壺の奥からコチラを窺う強大な気配がしたが、無視して真っ直ぐ帰った。

その後昼前にメイスン村を出立し、夕方にはオーロとアルジェントが生まれた《クラストー山脈》を越えて迷宮都市《パーガトリ》にまで至る事ができた。

とりあえず今日はここで一泊し、明日には到着する王都《オウスヴェル》に備える。

《百三十九日目》

早朝に迷宮都市《パーガトリ》を出立した後、俺達は無事、昼前に王都《オウスヴェル》に到着した。以前来た時と変わらぬ活気に、道を埋め尽くすような人ごみ。敷き詰められた石畳、行き交う馬車、煉瓦造りの家屋。大通りに立ち並ぶ様々な店舗、多数の屋台、飛び交う声、手から手へ流れる金銭と品々。

そして俺達に集中する無数の視線、畏怖や好奇の感情。俺達を警戒しつつ人ごみに紛れた冒険者達、陰からコチラを観察し監視する王国や他国の密偵衆。

繁栄の輝きを放ちつつ、それでいてどす黒い感情の渦巻く王都は健在のようである。こんな短期間で変わったら、そっちの方が異常だけでも。

そんな風に俺達は、むしろ以前よりも注目されながら王城の一区画にある《琥珀宮》の門前にやって来た。

そこでは騎士の少年と女性ばかりの衛兵達を従えた、年相応の屈託のない笑みを浮かべるお転婆姫が待ち構えていた。

名鉄を介して事前に連絡を入れたとはいえ、普通お姫様が客の出迎えをするものではないと思うが、お転婆姫なら常識が通用しないのも仕方ないと思ってしまっり、俺は相当毒されているらしい。

まず簡単な再会の挨拶を交わした後、お転婆姫が『よし登る故、お主は動くでないぞ。そうじゃないばしの間大樹のようになってたもれ』といった感じの事を言い、俺の身体を足下からよし登っていった。服装も予め動きやすいものを着ていたり、準備万端である。

やれやれ、と呆れつつも、俺はふと前世で姪っ子が遊びに来た時の事を思い出して、振り払わず

に時折ずり落ちそうになるお転婆姫をさり気無く補助してやる。やがて俺の肩に無事到達したお転婆姫は、『ドヤア』と表現するのが適切な表情で周囲を見下ろした。

満足しただろうから今度こそ下ろそうと思ったが、お転婆姫が拒絶したので断念。そのままお転婆姫を肩車した状態で琥珀宮に足を踏み入れた。

王宮として不変の気品を纏う琥珀宮に、初めて入るメンバーは放心——とくにセイ治くんのリアクションが大きかった。開いた口が塞がらないとは正にこの事か——していたが、活を入れ、作業に取り掛かる。

骸骨百足から荷物を下ろして、しばらく宿泊する事になる部屋に搬入したり、誰がどの部屋で寝泊まりするかなどを決めた後、お転婆姫に向けて簡単に団員を紹介する事に。

お転婆姫が一番驚いたのは、オーロとアルジェントを紹介した時だった。

二人の身体が種族の特性によって、生まれて三十日足らずにもかかわらず、かなり大きくなっていたからだ。

生まれたばかりの二人を腕に抱いた事もあるお転婆姫は、人間では考えられない早さで成長した二人に、驚きを隠せない様子だ。

ちなみにニコラはまだ赤ん坊だから錬金術師さんに預けてきていて、鬼若はミノ吉くんに懐いているのでアッチに付いていた。

普段は周囲を驚かす側のお転婆姫が逆に驚かされている様に、騎士の少年や他の近衛達は何処か穏やかな笑みを浮かべている。

夕食はお転婆姫の奢りで、豪勢な宴会が開かれた。

俺がまだ飲んだ事のない様々な種類の酒が大量に振舞われる。エルフ酒には及ばないものの、かなり上等な部類の酒ばかりだったので大満足である。

流石王族と思いつつ、中でもやはり迷宮産の物が格別に美味かったので、今度一鬼で酒と竜を求めて迷宮に潜ろうと心に決めた。

幸い王都の近くにある迷宮都市《バーガトリ》まで、空路ならば一時間とかからない。

《百四十日目》

今回やって来た理由であるお転婆姫の依頼。それは『琥珀宮の衛兵達の鍛錬指導』だ。なので、昨日から決めていた通り、早朝から衛兵達の訓練を開始した。

とはいえ哨戒などの仕事がある衛兵も居るので、全員を一度に集めて指導するのではなく、幾つ

かのグループに分けてある。

お転婆姫が琥珀宮の演習場を貸切にしてくれたので、とりあえず最初のグループはそこで基礎訓練から開始。

昔の映画で見た、とある軍曹よろしく、罵声を浴びせながら限界まで追い詰めてやる。

そして夕方、ボロボロになった衛兵第一グループ三十人全員を、セイ治くんに治療させる。

最初という事で本気でやっていないのにこの有り様とは。衛兵の情けなさに多少の不満を抱きつつ、まだまだ動ける《戦に備えよ》団員達と本格的な手合わせを行ってその不満を解消。

まったく、王女を守る精鋭なのだから、衛兵達にはもつと頑張ってもらいたいものだ、と思わない事もない。

《百四十一日目》

朝から衛兵第二グループを鍛えていると、昼前にお転婆姫の母——つまり第一王妃の使者がやってきた。

第一王妃とは、例の宗教熱心な王妃様である。

俺は彼女が崇拜する【五大神教】の中でも上位の【死海の神】の加護を持つ事になっている。だ

から滞在する間に何らかの形で接触してくるのは予想、というよりも確信していたが、面倒だし厄介なので正直あまり関わりたくはない。

とはいえ現状で王妃様の誘いを断る訳にもいかず。仕方なく昼食にお呼ばれする事になった。

パートナーを一人連れてきてもいいとの事だったのでカナ美ちゃんを同伴、それから少年を引き連れたお転婆姫も合わせ、総数四名で王妃様と食事する。

もちろん周囲には衛兵やメイドさん達が多数いるが、それはさて置き——

昼食は王妃様が暮らす《白金宮》プラチナムパレス内部にある、綺麗な庭で行われた。

王妃様はお転婆姫と同じ白銀に輝く長髪と黄金のような美しい瞳の持ち主の美女で、白い肌は美しさよりも病弱さを感じさせる。そんな王妃様主催の為、ガツツリとしたボリュームたっぷりの肉料理ではなく、パンや野菜中、心の軽食だ。肉を大量に喰いたい俺としては物足りないが、カナ美ちゃんは満足していたのでまあいいか。

個人的に量が足りないだけで、料理自体は美味なのだから、不満はそつと囁み殺す。

王妃も、話していると悪い感じはしなかった。

というのも、尊敬というか敬愛^{あが}というか、本当に崇める人物を前にした信者のような態度を示し

たからだ。

俺を殺し肉を喰らう事で己が身に神の力を宿そうと考えたり、鮮血を全身で浴びて身を清めたり、骨を素材に装飾品を造ったり、といった凶行はしそうにない。

実際にそんな事を考える輩もいると聞いていたので警戒していたのだが、どうやら王妃は俺のような上位神——本当は大神だが——の加護持ちと出会ってもあくまで敬うのみに止めるようだ。

ほっと安心しつつ、色々と探ってみた。

終わってみれば、俺にとつてもなかなか有意義な食事会だったのではないだろうか。

王妃様に対して抱いていた剣呑なイメージが崩れた今、交流を深めていけば良き友人になってくれるかもしれない。後ろ盾として好ましい人物とも言えるだろう。

などと思ってしまった瞬間が俺にもありました。

というのも、昼食を終えて俺達が琥珀宮に帰った後、白金宮に置いてきた分体越しに見てしまったからだ。王妃様とは絶対に関わりたくないと思ってしまう、決定的な出来事。

何が起こったのかを簡単に纏めれば、以下のようになる。

俺達が帰った後には、当然使用済みの食器が残る。勿論使用済みなものだから、綺麗に洗浄し、次

に使う時の為に備えるのが一般的だろう。

だがしかし、今回俺が使ったナイフやフォークの汚れを、王妃様は嬉々とした、否、情欲を滲ませる恍惚とした女の表情で、丹念に丹念に丹念に舐めとっていたのである。

白い肌と白銀に輝く髪、そして黄金色の瞳を持つ高貴な麗人が、何とも言えない色香を放つだけならばともかく、食器を舐めて嬉しそうにしているのは如何なモノかと。

そして王妃様の周りに居るほぼ女性のみで構成された白金宮の衛兵達も、心底羨ましそうに王妃様を見つめているのは一体どういう事なのかと。

そして何故、舐めて綺麗にした食器は豪華な専用箱に入れられて、王妃様の寝室に飾られるのかと。色々と問いたい。問いたいのだが、正直もう王妃様に近づきたくはなかった。覗き見している俺が言える事ではないが、感情的にキツイ。

俺の常識とか色々を軽やかに超越してしまっている王妃様の話はここでバツサリ終わらせるとして、とりあえず、王妃様とは関わるまいと決意。

午後はその記憶を振り払うように、団員達との訓練に集中した。

《百四十二日目》

今日は衛兵第三グループの訓練日……だったのだが、生憎の雨だった。



訓練場のコンディションは最悪で、ドロドロのグチャグチャだ。大量の水を吸って泥化した足場は動き難く、滑り易い。そして何より衣服が汚れる。

女性の比率が高い衛兵達からは訓練の取りやめが叫ばれたが、無論続行させてもらいました。ブーイングなどはハードな訓練で強制的に黙らせる。しかし肉体を酷使した後の飯は美味かったはずなので自然と飴と鞭になった……だろう。きつと。

まあ、悪天候時でも戦えるように備えるのは大切だと思う。

毎日やりたいとは思わないが、偶には違った趣向もいいものだ。

《百四十三日目》

訓練はカナ美ちゃんに任せ、お転婆姫に連れられてお転婆姫の父親——つまりは国王と謁見した。謁見の間には大臣やらなんやらが居て、面倒というか大げさというか、色々あった。

話が長くなるので大部分は省くが、まず王国内における俺達の立ち位置はお転婆姫の私兵、という事らしい。

本来俺達は傭兵で、仕事が終われば寸前まで戦っていた敵陣営側につく事さえできるのだが、どうやらお転婆姫があれこれしてそういう認識を広めてしまったようだ。

お出迎えの時に肩車させられたのもその一環だったらしく、王国では既にお転婆姫、あるいはお

転婆姫を擁護する派閥くらいしか雇ってくれそうにない。敵対派閥の大臣中心の貴族派から敵意ある視線が向けられていた点からも、事情は察せられた。

まあ、別に金を払ってくれるのならは大した問題ではないのだが、逃げ道を予め塞いでくるとは、お転婆姫もなかなかどうして侮れない。可愛い顔して、やる事はやっているようだ。

俺もお転婆姫を利用しているのだから、持ちつ持たれつ、という事だろう。

お転婆姫は王国の上層部からかなり警戒されている。かつてその私兵となった者達も、お転婆姫が力を持つのを恐れる者達から狙われ、その殆どが暗殺されたらしい。という訳で琥珀宮の俺達が宿泊している一角には、あれこれ罠を張らせてもらう事にした。

狙われるのが俺だけならばまだ問題ないが、オーロ達が狙われるのは堪ったモノではない。万が一何かあれば、犯人を殺すだけでは止まらないだろう。

謁見が終わると肩が凝ったので、風呂に入りながらカナ美ちゃんにマッサージしてもらった。やけに手付きが艶やかというかなんというか、とにかく色々溜まっていたモノをリフレッシュできたので良しとしとこう。

《百四十四目》

まだ陽も出ぬ早朝、さっそく暗殺者がやってきた。大半は昨夜の内に設置した罠で捕縛、あるいは殺害したが、それ等を駆け抜けて俺達の寝室にまで侵入してきた奴が一人だけいた。

侵入してきたのは、黒衣と紫色の液体の滴るナイフを装備した仮面の男。そして俺が眠気を抑えて対峙した途端、【直感】と【罠解除】が激しく警鐘を鳴らし始めた。

何故そうなったのか数瞬観察した結果、どうやら男の体内に爆弾のようなモノが埋め込まれているらしいとわかった。遠隔操作できるシロモノではないのが救いと言えば救いだ。

何これ凄く鬱陶しい。

殺したら周囲を巻き込んで自爆してしまうようなので、とりあえず分体を【寄生】させて【隷属化】。自分の意思では指一本動けなくしてから情報を引き出そうとしたが、どうやら精神操作系のマジックアイテムか魔法によって記憶や自由意思を消されているようだ。

それは他の捕縛した奴等も同様で、暗殺者達はまるで命令された通りの事しかできない、虚ろな人形だった。

身体の内は奪えたものの、初めから壊れている精神を回復させるのはちよつとどころの間で

はない。

仕方ないのでこの人形／暗殺者達から情報を引き出すのは諦め、心臓付近に埋め込まれていたマジックアイテムを摘出。

その際暗殺者の胸が内側から弾け飛んだが、それは仕方ない。
暗殺者達の死体をボリボリと頭から丸齧り。まるかじ ついでに爆発系のマジックアイテムもガリガリと。

「能力名【爆裂】バーストのラーニング完了」

「能力名【人間爆弾】のラーニング完了」

暗殺者達の装備類には元凶を割り出せそうな品は一つもないが、多少のマジックアイテムを得られたので儲けモノ。

食事の後は、とりあえずお転婆姫に報告。

すると『ふむ、ならば犯人はすぐに割り出すのでな。今日の不満や怒りは、後で発散するがよいぞ』と言われた。

まあ、お転婆姫ならすぐに割り出せるだろう。

今日でグループ毎に区切って行っていた衛兵達の訓練も一通り回り、大体の強さや癖などは把握できたので、今後はそれぞれのいい部分を伸ばしていこうと思う。

《百四十五日目》

今日は午前だけ衛兵達の訓練を行い、午後は城下町に出掛けるお転婆姫に護衛役として付いていく事になった。

セイ治くんなど遠征初体験組には、丁度いい機会だったので休暇を与え、王都を自由に見て回らせる。とはいえ何処から暗殺者の手が伸びるか分からないので、ある程度固まって行動するように指示。

イヤーカフスのおかげでどこに居るか分かるし、それぞれ戦闘能力もそこそこあるから平気だろう、きつと。

仮に攫さらわれたり殺されたりしても、仇は即座に討つから大丈夫。

それで本題のお転婆姫の護衛は、《戦に備えよ》パラベラムからは俺とカナ美ちゃんと赤髪ショート、それからオーロとアルジェントの五名。他は騎士の少年と私服に着替えた衛兵達が十数名、といった布陣になっている。

今までは数十名単位で護衛していたらしいので数はかなり減っているが、まあ、大丈夫だろう。お転婆姫も以前と比べ大人しくなっている。

ぶらりぶらりと、表通りだけでなく裏通りも、肩車したお転婆姫の指示に従って探索。

裏通りでは馬鹿に絡まれたり、ヒト攫さらいの犯行現場を目撃したり、暗殺者を叩き潰したりと色々あったが、マジックアイテムや武器を扱う隠れた名店も発見できたので有意義な一日だったと言えるだろう。

二日後には完全な休暇が待っているのです、その時は単鬼たんきでちよいと、迷宮都市に赴くでしょう。迷宮の酒や、まだ出会った事のないモンスターに対する思いは募つるばかり。

ああ、楽しみだ。凄く、楽しみである。

《百四十六日目》

今日も陽が昇らぬ早朝から衛兵達の訓練で汗を流す。

衛兵達は個人個人の素質が高い。王族が暮らす宮を守るだけあつて優秀な人材ばかりだ。俺は衛兵衛兵と言っているが、実質的にお転婆姫専属の近衛兵のようなモノだ。常時傍に居るのは騎士の少年だけだが、彼等が担う役割は多い。

そして成長が非常に早い彼等の中でも、騎士の少年の成長は著いちじしかった。

その要因の一つとして、武器の変更があげられるだろう。少年は最近、剣ではなく短槍を使い始めたのである。

切っ掛けは、以前俺が短槍を使つてはどうかと勧めたからなのだが、正直即座に代えるとは思わなかった。

無論完全に剣を捨てた訳ではないが、それでも長年使ってきた得物を変更するのはかなり迷ったに違いない。

実際、動きは格段に良くなっている。手加減したとはいえ模擬戦で俺に穂先かすを掠さらせたのだから、剣よりも短槍を扱う才能の方が秀でているのは間違いない。

もしこのまま少年が短槍を使い続けて成長してくれば、将来、《詩篇覚醒者／主要人物》かそれに近い使い手になるのではないだろうか、と密かに期待している。

そしてもし本当にそうなら、更に俺達と敵対する事にでもなったら、と思うと涎よだが出そうだしきつととても美味な存在となっているに違いない。

今はまだ喰った事が無いが、きつと《詩篇覚醒者／主要人物》は絶品のはずだ。喰つてみたい、本当に喰つてみたい。

豚や牛を育てる畜産家もこんな気持ちなのだろうか。

——ジュリリ。と、いかんいかん。

まあ、そうならない事を祈ろう、主に少年の為に。

という具合に少年の存在は将来的な楽しみみであるが、彼の成長は周囲に思わぬ影響を及ぼしている。

少年の成長につられてか、オーロとアルジェントも負けじと頑張っている。殆ど一緒に訓練しているの、二人とも少年をライバル視しているようだ。

オーロとアルジェントの成長の為に、共に切磋琢磨できる存在が居るのは、色々と好都合だ。

基礎訓練が終わったら琥珀宮の風呂に浸かって身体を洗い、午後は個別に訓練でもしようかと思ったが、またお転婆姫が王都を回りたいと言うので再び護衛役として王都を散策する事に。

散策中にまた色々トラブルがあったりしたが、他愛もない事ばかりなので詳細は省略しよう。

小さなヒト攫い専門の犯罪組織を一つ潰して構成員を全員喰ったとか、王国の同盟国である帝国以外の国——【ビーストキング獣王】ライオネルが治める《エストグラン獣王国》や【ミルディオンカサ魔帝】ヒュルトンが治める《アタラクア魔帝国》、人間至上主義を掲げた《ルーメン聖王国》など——の諜報員を幾人か路地裏で喰ったとか、大商人からとある貴族に贈られた賄賂の情報を掴んだりした程度なので、あえて

語る事でも無い。

数十人喰ったのに、アビリティは一つも確保できなかったしな。

陽が暮れたら、お転婆姫と共に琥珀宮まで帰る。

明日は休みなので、とりあえず派生迷宮まで飛んで、潜ってみようと思う。

下準備も万全である。

《百四十七日目》

まだ太陽も出ていない早朝の空を、外骨格を纏って王都から最も近い迷宮都市《パーガトリ》に飛んでいく。

三十分と経たずに到着し、空中から内部に入った。門を潜らなかったのは、単に検問が面倒だったからだ。

なに、バレなければ問題ない。そしてバレたとしても、目撃者を喰って証拠隠滅すればいい。

しかし特に何事も無く、予め先行させていた分体から、丈夫な紐に小さな金の板の飾りが付いているシンプルなデザインのネックレスを受け取り、即座に装着。

このネックレスは【大神】の石柱が運営する総合統括機関が発行した、【迷宮踏破許可具】と呼ばれる

れる品だ。コレを装備していれば、亜人などでも迷宮内部で発生したモンスターと区別される。

無為な衝突を避ける為、迷宮に潜る際には装備を推奨されている品だが、別に無くても迷宮に入る事はできる。

ただしネックレスを購入するメリットはもちろんある。

このネックレスを着けていれば、ダンジョン内で他の冒険者に殺された場合、犯人のネックレスが赤く発光する仕組みになっている。犯人が別のネックレスに着け替えても、新しくネックレスを造っても、再び赤くなるのだそうだ。

そしてギルドは、総力を以て犯人を捕縛する。意図的に金品を奪っていたりすれば、拷問の末に死刑となる事もあるそうだ。

勿論色々と抜け道が無い訳ではないが、コレがあれば他の冒険者に殺されるリスクを減らせ、ある程度の安全と安心感を得られる。

他にもギルドお抱えの商店の買い物で値引きされるなどの特典はあるが、一番大きなメリットはこの安全の確保だろう。

以前ミノ吉くんが迷宮で攻撃されたのは、【存在進化】^{ランクアップ}による身体の巨大化で、このネックレスが弾け飛んでしまったからに他ならない。

ただし厄介な事にこれ、一つ発行してもらうのに銀貨五枚が必要になる。

しかも迷宮ごとにネックレスが必要になるので、ダンジョンに潜る度にそのダンジョンに対応したネックレスを買う必要があるのだそうだ。

使用済のネックレスを他のダンジョンに持ち込んでも効果を発揮せず、青く発光して警告を受けるだけ。

なかなかあこぎな商売だ。

銀貨五枚なんて、迷宮である程度の階層を踏破すれば簡単に稼げてしまう額だというものも、悪辣^{あくろう}さに磨きをかけている気がする。

そんな雑談は一先ず置いて、俺は《パーガトリ》が内包する派生迷宮の一つ——【サクロプの採掘場】^{さいくしょう}と呼ばれる迷宮に潜る事にした。

【サクロプの採掘場】は地下に下り続けるという一般的なタイプのダンジョンで、地下二十階まであるのだそうだ。行程はやや短いが現れるモンスターの強さで中級者向けとなっているそうなので、日帰りで挑むには丁度いい。

名前からして岩肌剥き出しの洞窟のようなイメージを持っていたのだが、一面単色の金属のようなモノで舗装された、仄暗い回廊で構成されている。

微妙な暗さは【暗視】の能力を持たない人間からすれば少々厄介なのかもしれないが、設置され

た罫は少なく稚拙^{ちせつ}で、簡単に壊^{やぶ}せた。
中級者向けだけあってかなり温^{ぬる}い。

少々物足りなさを感じながら進んで行くと、ピッケル装備で全身の筋肉がそれなりに隆起した、やや黒い肌のコブリンを一体見つける。『マインコブリン』と呼ばれるコブリンの一種だ。

さっそく銀腕で頸^{くび}を刎^はね、頭部を喰^くつてみる。

味は、まあまあ、だろうか。美味しい訳ではないが、そこまで不味い訳ではない。至^{いた}って普通、といったところか。

普段なら一口喰^くつて後は放置するが、今回は実験を兼ねて色々調査した。

ダンジョンで死んだ者の肉体は一定時間が経つと消える、と言う。

ミノ吉くん達が調べてくれたこの内容を確認したところ、本当にそうなっているらしい。

死体は『収納のバックパック』などに入れても制限時間内に外に持ち出せなかったら消える為、冒険者がダンジョンで死んだら、街の一角にある共同墓地の巨大な慰霊碑に名が刻まれるそうだ。

つまりダンジョンではモンスターもヒトも関係なしに、死ねばダンジョンに喰^くわれる。

だが不思議な事に、ダンジョンのモンスターを食材にする事はできる。

深いダンジョンで携帯食糧が無くなったら、殺したダンジョンモンスターを調理して食べるのだ
そうだ。

そこで、何処から何処まで、何をすればダンジョンモンスターを持ち帰れるのかを実験した。

口に一噛みの肉を含む、マインコブリンの指を一本右手で摘^{つま}む、銀腕の形を変えて指を一本まるまる包んで体内に取り込む、【異空間収納能力^{アイテムボックス}】に右足を放り込む、そして胴体をそのまま放置すると、放置した胴体が消えた時、右手で摘んだ指も消えたが、口内の肉と銀腕で包んだ指、アイテムボックスに入れた右足はそのまま残った。

アイテムボックスに残るのは少々驚きだが、好都合なので良し。この結果の原因を強引に推察するとすれば、体内に取り込みさえすれば消えないようになっていて、アイテムボックスも俺の一部として認識されたから、だろうか。証明はできないが。

とにかく、これで外で待っているカナ美ちゃん達にお土産ができた。

実験の後は予め調べていた最短のルートを進みつつ、遭遇するモンスターは片っ端から殺害して肉を喰^くい、残りはアイテムボックスに放り込み、どんどん深く潜^{ひそ}っていく。

そして潜り始めて四時間程度が経過した時、俺は最深部に到着していた。

ドワーフのバルト・バートラが、とあるボスのドロップアイテムを欲しいと言い出したのは、今から二月前の事。

女冒険者アーティをリーダーとするバルト達五人のパーティ《剣鉄の走狗》が派生ダンジョン【サクロプの採掘場】に潜り始めたのが、今から一月と二十六日前の事。

そして幾度もの挑戦を繰り返したものの目的のアイテムが出ず、ストレスが溜まっているのが現在。

最下層にあるボス部屋近くに存在する、モンスターが出現しない安全地帯にて、金髪をポニーテールにした女剣士のアーティは、四人の仲間と作戦の最終確認をしていた。

「何度も言うようにだけど、大剣のベルラが出てきたらザイクが正面で攻撃を防ぎ、左右から私とバルトが足を削って、後方からベランナとアイシャがトドメの大技を撃ち込む。魔韻のハッチェルが出てきたらベランナとアイシャが小技を撃ち込んで詠唱を阻害、ザイクが二人を守り、ハッチェルの後方に回り込んだ私とバルトが攻め立てる。勿論真先に狙うのはメイスね。そして本命

の震槌のガルンドが出てきたら、あの大技を警戒しつつ普段通りに、って事で。これでいいかしら？」

アーティ達が幾度も挑み、幾度もボスモンスターを殺したにもかかわらず目的のアイテムを得られていないのには、二つの大きな理由があった。

一つは、欲しいアイテムのドロップ率がそもそも低い事。彼等は、ある方面に特化した能力を持つ、【固有】級のマジックアイテムを狙っている。

そしてもう一つが【サクロプの採掘場】のボスモンスターである【単眼鬼】には、三タイプが存在するという事。

頑丈で分厚い大剣を小枝のように振るう、若きサイクロプス大剣のベルラ

強力な魔法を主な攻撃法としつつ巨大メイスを使う、女サイクロプス魔韻のハッチェル

地を粉碎し地揺れを引き起こす巨大な槌を持った、三タイプの中で最強の老サイクロプス震槌のガルンド

アーティ達が求めるマジックアイテムをドロップするのは震槌のガルンドであり、ガルンドが出現する確率はベルラやハッチェルと比べ、やや低いのである。

よって時間がかかってしまうのも、仕方がない事だった。

「はいはいと、了解了解。じゃあさ、さっさと行こうぜ！」

アーティの問いかけに返答したのは、熊頭が描かれたタワーシールドと帯電するバスタードソードを装備した、二足歩行する熊こと熊人のザイクだった。

ヒトに本能的な恐怖を抱かせる熊そのままの獠猛な容姿とは裏腹に、何処か抜けたところが目立つ、毛むくじゃらのお調子者だ。

「焦らないで、少しは落ち着きなさいよザイク」

急かすザイクを諫めつつ、アーティは残りの三人——重金屬鎧とモーニングスターを装備したドワーフのバルト、黒紫色のローブとタクト型の魔杖を持つ魔術師のベランナ、聖別された種や聖水などの小道具とフットマンズ・フレイルを携えた武裝神官のアイシャに視線を送り、三人とも大きく頷くのを確認した。

「そ。ならさつさと——」

休憩を兼ねた作戦会議を終え、ボス部屋に行こうか、とアーティが言おうとした瞬間に響いた爆音と、大きな地揺れ。

まるでダンジョン自体が軋み、崩れてしまうかのような激しい震動がアーティ達一行を襲う。五人はその凄まじさに、堪らずその場で固まり、震動が止むのを待った。

やがて震動が止むと、壁からはパラパラと小さな欠片と埃が舞い散り、ダンジョンは元通りの静けさに支配される。

「なにが——あー、先越されたか」

震動から即座に立ち直ったアーティは、先ほどの音と揺れの原因を経験から割り出し、右手で目を押さえながら天を仰いだ。

やってらんない、とでも言うような態度である。

「うわ、俺達の本命じゃんか、最悪。つたくルーキーはコレだから。ボス戦時の取り決めに知らんのか、取り決めに」

アーティにつられてか、ワーベアーのザイクも悔しそうに愚痴を零した。

「まあまあ、アーティさんも、ザイクさんも、落ちついて落ちついて。こんな事も、偶にはありますよ。取り決めだってそもそも知らないんじや、どうしようもないじゃないですか」

「アイシャは気楽ねえ。取り決め知らずのルーキーがいなければ、ガルドは私達が狩れてたのに」

「ガッガッガッガ。ええじゃねえか、済んだこたアよオ」

原因が何か、すぐに分かってしまったアーティ達はそれぞれの思いを吐露する。

待ちに待ったガルドと闘う機会を逃して残念がるアーティとザイク、それを慰める天然気味なアイシャに、少々呆れたベランナが苦笑し、豪快に笑うバルトの声が響く。

仲が良いだけに、続けて遠慮のない言葉が飛び交った。

五人がそのような反応をしたのには訳がある。

基本的にダンジョンのボス部屋の近くには、安全地帯と呼ばれる空間がある。そこに先着のパーティが居た場合にはそのパーティの後ろに並び、その後にはボスに挑戦するのが、冒険者の間にある暗黙のルールなのだ。

要するに、誰かが順番待ちをすつ飛ばした、という事になる。

この取り決めは、ダンジョンという少々変わった空間内で無駄な怨恨などを生まない為の紳士協定みたいなもので、絶対に守らなければならないものではない。

だが余計な諍い^{いさか}が起きないようにする為、熟練の冒険者が殆どそうするのは事実である。

安全地帯で一休みしても、損はないのだから。

とはいえ今回のように先を急ぐあまり余裕の無いルーキーが順番を追い越す事もあるにはあるので、慣れたものだ。五人の愚痴は早々に終結した。

「んじゃ、ちよいと見に行こうか？　どんな事になつてるか気になるし」

と聞いたのは、パーティリーダーのアーティだった。

ニヤニヤと悪だくみしているような笑みからは、ルールを知らないようなルーキーがボス戦でどうなっているのか見学してやろうという思惑が透けて見える。

「賛成ね。どんなルーキーか、見てみたいし。アイシヤもそうでしょ？」

「そうですね、ベランナさん。もし怪我とかしてたら、治療してあげないと。命は大切に、ですよ！」

「ガッガッガッガ、面白そおだアな!!」

「ならさつさと行こうぜ!!　早く早く!!」

皆乗り気な返答をしたアーティ達は、間もなくボス部屋の扉の前に到着した。震動がダンジョンを駆け巡ってから数分も経っていない。

先ほどの震動は、ボス部屋最奥側の巨大な扉からボスモンスター^{モンスター}、震槌のガルンド^{ガルンド}が登場するのと同時に振り下ろす槌の一撃によるもの。つまりはボス戦はまだ始まったばかりのほずである。だが、開放された扉から見えるボス部屋の中には、あまりにも悲惨な光景が広がっていた。

「なに……アレ？」

そのまま消えてしまうかのようにひっそりと囁^{ささや}かれたアーティの疑問に、他の四人は返答する事ができない。

皆ただただボス部屋の中に意識を集中させ、視線を逸らす事もままならない。

五人が等しく感じているのは、強烈な恐怖だった。

床一面に広がる夥^{おびただ}しい量の、むせかえるような鮮血の海の中を、右腕一本で必死に這^はって逃げようとする一つ目の巨鬼——【単眼鬼^{サイクロプス}】

サイクロプスの立派な灰色の顎髭^{あごひげ}は血を吸って赤く染まり、皮膚にベチャツとへばり付いていた。

本来九メートルを超えるはずの巨躯が、両脚の大腿の半ばから下を切り落とされ、大きく縮んでいる。左腕に到っては、肩から先が無い。それ等の巨大な傷口からは、赤黒い血が止めどなく流れて出ていた。

腹部も切り裂かれているのか、臓腑の一部が零れ出ている。這えば這うほど中身が溢れ出るが、ガルドはそれを気にする事無く這い続ける。

それほどまでに、そうしてしまうほどに、恐れているのだ。

一つしかない目には恐怖が溢れ、口からは聞くに堪えない奇妙な悲鳴を上げている。

アーティ達の記憶にある、震槌のガルドは、どのような敵が来ようとも真正面から叩き潰してくれる、とでも言いたげな威風堂々とした姿だった。だが、今はそんな姿の影も形もない。

目の前の【三本角の黒鬼】から必死で逃げようとするその姿は、確かに無様だ。

以前とのギャップがありすぎて、より一層そう感じるのだろう。

しかし、今はそれを誰も笑えなかった。

己の身の丈ほどもある四角い刀身の大剣でガルドを解体している【三本角の黒鬼】が鬼人である事は、アーティ達も理解できている。

アーティ達には何人か鬼人の知り合いもあり、その戦闘能力が竜人達と同じように桁外れだとも知っている。

しかしボスモンスターを、それもダンジョンボスを十分と経たない内にあそこまで解体してしまえるというのは、あまりにも常識外れだ。

だがそれくらいの事では、ただ見ているだけのアーティ達すら身動きが取れなくなるほど恐怖するものではない。

むしろその強さに憧れを抱き、尊敬の眼差しを向けていただろう。ダンジョンという、強い者こそが正義として君臨できる場所に挑むアーティ達は、暴力、知力、財力などありとあらゆる《力》に対して、宗教めいた妄執を抱いているのだから。

なのに何故恐怖するのか。その理由は、簡単な事だった。

「コリコリとした菌ごたえで噛めば噛むほど旨が出る肉と、味わい深くも飲みやすい濃厚な血。なんだ、結構美味いじゃないか、サイクロプス」

【三本角の黒鬼】の眩きを、索敵能力に優れた斥候系職業の一つである【義賊】を持つアーティは確かに聞いた。

そう、アーティ達が身動きができないほどに恐怖したのは――

(生きたまま、喰ってる……)

震槌のガルドが、【サイクロプの採掘場】最強のボスモンスターが、一方的に、生きたまま解体されてその肉体を喰われていたからだ。